

[巻 頭 随 想]

日本ブドウ・ワイン学会甲府大会によせて

伊藤 和秀

(サッポロビール株式会社 生産技術本部長付
兼 製造部 ワイングループリーダー)

この度、日本ブドウ・ワイン学会 2016 年度大会が 2013 年大会から 3 年ぶりに山梨大学での開催に決まり、私が実行委員長をお引受けすることになり誠に光栄に存じます。日本国内の人口減少、酒類の総需要が減少する中、日本におけるワイン市場は、底堅い成長が続いており、特に国産ぶどう 100%原料による日本ワインに対する評価の高まりとともに、ワイン製造に係わる新規メーカーの参入が続いております。国税庁課税部酒税課の調査によると、果実酒製造免許（試験製造免許を除く）を有する製造場で、ぶどうを原料として果実酒を製造している免許場数は、平成 28 年 3 月末現在、261 者（280 場）とのことで、特に果実酒の新規免許場数の推移では、試験免許場数を含めると、平成 26 年（2014 年）には 17 件、平成 27 年（2015 年）には 34 件と、ここ数年で急激な増加が認められるようです。

このように日本ワイン市場への新規参入が継続しているのは、2003 年から始まった国産ワインコンクール（現在の日本ワインコンクール）、2010 年の甲州、2013 年のマスカット・ベリー A の国際ブドウ・ワイン機構（O.I.V.）への登録などが大きな契機になっていることと思いますが、日本ワインの品質向上においては、日本ブドウ・ワイン学会が果たしてきた役割が非常に大きいと考えます。

日本におけるワイン市場がこれまで以上に成長していくには、日本の気候・風土の中で高品質なブドウを栽培すること、各産地におけるブドウ品種の特性を最大限に引き出したワイン醸造を行うことが最重要テーマであり、ブドウ栽培とワイン醸造に関する様々な研究の重要性はこれまで以上に高まってい

ます。

ワイン製造に係わるメーカーにおいては、2015 年 10 月に国税庁より告示された「果実酒等の製法品質表示基準」への対応や、原料ブドウを安定的に確保するための原料施策などが実務的な課題として注目されていますが、ブドウ・ワインに関する研究は直近の課題に振り回されることなく、継続した取り組みが重要であり、研究に携わる皆様の成果こそが今後の日本ワインの品質向上、日本ワインのブランド価値向上の源泉であると考えます。

日本ブドウ・ワイン学会は、1984 年に設立され、本会におけるブドウ栽培・ワイン醸造とこれらに関連する分野での活動の成果が、日本ワインの品質向上に大きく貢献して参りました。しかし、これまでの日本におけるワイン市場の歴史を振り返ると現在の日本ワインへの期待、評価は必ずしも確立されたものではないと思います。今大会では、ポスター発表、口頭発表、セミナー等が二日にわたり開催されますが、ご出席いただきました皆様には活発な意見交換を行っていただき交流を深めるとともに、ここで発表された研究成果が日本ワインの更なる品質向上に貢献できることを期待しております。

最後に、今大会の会場をご提供いただきました山梨大学、並びに今大会の開催にご尽力いただきました皆様に心からの御礼を申し上げます。